

平成二十六年十一月吉日初版作成

すべてが成就する  
世界を現わす

高嶋善二郎

## 目次

感情をコントロールする	3
感情想念の本質	5
愛は感情想念の波に乗って働く	6
常に愛の本質である光に変える	6
肉体界に天下ってきた分霊の相(すがた)	7
思い通りになる世界	8
生命の流れは滞らせない	9
すべてが成就する世界を現わす	10

### お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(電話) 〇四―七一二二―三七五二

(アドレス) [zensan@peach.ocn.ne.jp](mailto:zensan@peach.ocn.ne.jp)

## すべてが成就する世界を現わす

### 感情をコントロールする

2014年3月号で、昌美先生は、「私たちは宇宙神の根源に直結し、我即神也の自分が表に出て、もう肉体感情にコントロールされない。すべてが成就する世界が、自分自身の魂によって出た」と言われています。

「本日、五井先生は皆様に「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した」とおっしゃいました。ということは、我即神也の自分が表に出て、もう肉体感情にコントロールされない。すべてが成就する世界が、自分自身の魂によって表に出たということなのです。

今までは、魂の我即神也の自分が奥へ引っ込んでいたのです。そして苦しい、悲しい、恐怖だ、怖い、不可能だ、出来ない、駄目だという感情の想いで自分がコントロールされ、この肉体は操られてきた。ところがここにいる人、世界中で祈っている人は、我即神也が自分をコントロールしている、ですから、不可能などない、というのが当たり前になっているのです。『白光誌』2014年3月16ページ)

このお言葉にある肉体感情にコントロールされない、即ち肉体感情をコントロールするとはどういうことなのか、またすべてが成就する世界とはどういう世界なのか、魂とはどういうものなのか等ご質問があまり

ました。

そこで、それらについて整理していききたいと思います。

まず感情をコントロールするとはどういうことなのか。このことはわかたようでわからないという方が少なからずおられるのではないのでしょうか。

感情について、大変参考になる五井先生のお言葉を『靈性の開発』の中からみてみましょう。

「光一元の世界には闇がないと同様に、闇一元の世界で光の存在がない場合には、闇はそれ自身闇であることを自覚することはないが、ひとたび光がそこに放射され始めると、光と闇との区別がはっきりついてくる。そして光が前へ進むにつれて、闇は自身の姿をそれだけずつ、削り取られてゆく形になります。

神がその光線を地球界に働きかける場合には、どうしても地球界と同じような物質体の肉体人間を必要とする。

ところがこの肉体身というのは、地上界に属する物質なので、地上界的な性質をそれ自体が持っているので、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれて、未開発が開発されてゆく過程において、種々様々な動揺や変化が起こってくる。言い換えれば、人間がこの地球という物質世界に、肉体という衣を纏って生活するようになってからは、どうしても肉体的自己保存ということに重点が置かれ、競争心や争いや恐怖や恨みや怒り嫉妬などが生じてきたわけです。

即ち本来の人間が神の光の側にあるにもかかわらず、反対的に考え、かえって自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視してしまったのです。

この不安恐怖つまり神の光、靈性を離れた考え方が無明であるわけで、それが業想念の生まれた原因なのである。これがキリスト教的にいえば、アダムとイヴの原罪といわれているところなのです。

このように人類自身が神の光そのものであることを忘れ、闇の産物である肉体人間であると誤り考えてしまったことが、罪といわれるものの最大の原因なのだとされています。『靈性の開発』100ページ)

五井先生は、また別の言い方を次のようにされています。

「大靈(神)はすべての力の根源であって、すべてを一つに結ぶ調和そのものであるのに、その大調和の姿がそこに現われようとして、業想念の壊滅をひき起こしているのに、そうした神の理念の現われの方に想いをむけずに業(カルマ)の方に想いをむけるから、不平不満や、恐怖や恨みが起こる。不平不満の想念の人には不平不満の事柄がかえってき、恨みを持つ人には、恨みの想いがかえってくる、自分が出したものはすべて自分にかえってくる、というのが、業(カルマ)の法則なのである。この業(カルマ)というのは、神がなくてあらわれたものではなく、間接的にはやはり、神の力によって動かされているのであるから、神がその必

要を認めない時には、崩れ去るのです。『靈性の開発』99ページ)

「光とは明るい扱われのない心、いつも神のみ心の中に入っている想いから発する本質的な生命力であり、愛とは分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となるのであって、その根本は自己が神の分かれである本質を知っている者の行為なのである。光の働き、愛の心がすべての行為の根本になっていく人が悟った人である。

愛が感情の波に蔽われてしまえば、それは執着となって、愛の心をマイナス面にひきずっていつてしまうが、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたときには、その感情は光となって、相手を照らし、人類を輝かすのである。

愛は光そのものであるから、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を発揮することが出来ない。それは、電流は眼に見えなくとも流れているのだが、電球という器を通さないとその光がわからないようなもので、本来の光を肉体界の波長に合わせて、肉体界に流れてきて、光本来の役目を果たしてゆくことが、この地球界における愛の働き方なのである。そこで肉体人間の世界では、愛と愛情とはほとんど同じ意味で使われている。

だから悟った人は自己中心の感情、即ち業想念感情はないが、他の人の感情は人一倍感じるもので、その感情に執着せず扱われ

ずに、常に愛の本質である光に変えてゆき得る人なのである。自己の中に他の人の感情のひびきを受け入れる要素がなくして、他人のために働くという気が起こるわけがない。愛の働きが出来よう筈もない。悟った人、あるいは覚者と云われる人は、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得る人、つまり、その人の一挙手一投足が、神の子の本質である、愛と真の人であるというわけである。『宗教問答』問80 悟ると全く感情が亡くなってしまうのですか251ページ)

「愛はすべてを癒すのである”

すべての不幸を打開するのは、愛の心が根底にある行動である。私の祈りは、愛の祈りである。智慧は愛のうちに含まれていると私は思っている。

ただし、愛とは情ではないことを申し添えて置きたい。

情は愛から生れたもので、愛情と一つに呼ばれているように、愛とは切っても切れぬ関係がある。そのため、仏教では、愛さへも業と呼んでいて、迷いの本体である、と説いている。そして神の愛を慈悲と呼んでいる。私が今まで愛と書いてきたのは、情(執着)ではなくて、英語でいうCharity(大慈悲心)のことである。しかし、愛は善で、情は悪である、と簡単に割り切ってもらっては困る。この現世では光に影が伴うように、愛には情がつきまとうのである。切りがたい情を涙を呑んで断ち切ってゆくところに、人間の美しきがあり、愛の輝きがいやますのである。

情を簡単に切れることが、その人の冷酷性の現われであったら、情に捉われやすい人よりなお悪いことになる。

愛深い人が情におぼれぬように自重してゆく姿には、美があるもので、そうした人の動きの中に、神のこの現象界における生き方が示されているものと思われる。

私の祈りは、自分が相手と一体になって、相手を抱いたまま、神の世界に昇ってゆこうとする祈りである。

祈りとは、まず自分の心を空っぽにすることである。それまでの自分をひとまず捨てて、神だけを自分の心に住ませることである。『神と人間』95ページ)

### 感情想念の本質

以上をもとにこの疑問に対する答えを整理します。

**感情にはどういうもので、どうして起こるのか。**

本来の人間が神の光の側にあるにもかかわらず、反対的に考え、かえって自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視してしまい、神の光、霊性から離れたため。即ち人類自身が神の光そのものであることを忘れ、闇の産物である肉体人間であると誤り考えてしまった。

そして肉体身というのは、地上界に属する物質なので、地上界的な性質をそれ自体が持っているので、神の光が地球界の闇を進んでゆくに連れて、未開発が開発されてゆく過程において、種々様々な動揺や変化が

起こってくる。言い換えれば、人間がこの地球という物質世界に、肉体という衣を纏って生活するようになってからは、どうしても肉体的自己保存ということに重点が置かれ、競争心や争いや恐怖や恨みや怒り嫉妬などが生じてきた。

別の言い方をすれば、大霊(神)はすべての力の根源であって、すべてを一つに結び調和そのものであるのに、その大調和の姿がそこに現われようとして、業想念の壊滅をひき起こしているのに、そうした神の理念の現われの方に想いをむけずに業(カルマ)の方に想いをむけるから、不平不満や、恐怖や恨みが起こる。不平不満の想念の人には不平不満の事柄がかえってき、恨みを持つ人には、恨みの想いがかえってくる、自分が出したものはすべて自分にかえってくる法則により、競争心や争いや恐怖や恨みや怒り嫉妬などの感情は大きくなってきたといえます。

### 愛は感情想念の波に乗って働く

このように感情を感じることは、悪いことなのでしょうか。

感じる感情には、自己中心の感情、即ち業想念感情や、他の人の感情もあります。

これらの感情は、肉体内を保持している限り、感じるものです。その意味からすれば、感じることは自体必要なことで、これらの感情を通して神の心から離れた業想念を光に還元し、この肉体界を光明化していつく時と場を与えられたといってもいいものなのです。

五井先生のお言葉では、愛は光そのものであるから、肉体の人間世界

に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。それは、電流は眼に見えなくとも流れているのだが、電球という器を通さないとその光がわからないようなもので、本来の光を肉体界の波長に合わせ、肉体界に流れてきて、光本来の役目を果たしてゆくことが、この地球界における愛の働き方なのであるという箇所に対応しています。

五井先生は、感情を感じることに問題ではなく、神の理念の現われの方に想いをむけずに業(カルマ)の方に想いをむけてしまうことが問題であるといわれているのです。

### 常に愛の本質である光に変える

神の理念の現われの方に想いをむけると、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたし、その感情は光となって、相手を照らし、人類を輝かすと五井先生は言われているのです。

感情をコントロールするとは、業想念感情の波の中に生活しながらも神の理念の現われの方に想いをむけ、その業想念感情に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し、常に愛の本質である光に変えてゆき得る状態(すべてに感謝できる状態)になることではないでしょうか。

しかし、感情をコントロールすることは、言葉で言えば、簡単のようであるが、なかなか難しい。この現世では光に影が伴うように、愛には情がつきまとうのである。切りがたい情を涙を呑んで断ち切ってゆくと

ころに、人間の美しさがあり、愛の輝きがいやますのである。愛深い人が情におぼれぬように自重してゆく姿には、美があるもので、そうした人の動きの中に、神のこの現象界における生き方が示されている。それを持ち越えてゆくには、自分の心を空っぽにし、自分が相手と一体になって、相手を抱いたまま、神の世界に昇ってゆこうとする祈りが不可欠である。五井先生は解説されています。

### 肉体界に天下ってきた分霊の相（すがた）

魂とは何か。分霊とはどう違うのか。

拙書『究極の光の一筋を降ろす』でも言及しておりますが、ここで言われている魂とは、肉体界に天下ってきた分霊の相（すがた）即ち、分霊から幽体迄の部分を示しています。幽体は私たちの過去世からの潜在意識を記録している場所であり、その奥に神意識が存在する場所でもあります。

冒頭の昌美先生のお言葉である「私たちは宇宙神の根源に直結し、我即神也の自分が表に出て、もう肉体感情にコントロールされない。すべてが成就する世界が、自分自身の魂によって出た」について、魂に焦点をあわせて整理すると、次ぎのようになるのではないのでしょうか。

神のみ心から離れた、誤る想念の潜在意識(過去に発した想念意識)と小さな範囲しか考えられない顕在意識の肉体我が、混然一つになり、想念の波を張りめぐらしてしまつて縦に流れてくる神智(神意識)をさ

えぎり曇らせてしまつていた魂が、「我即神也」の究極の真理(人間は本来光の側にあるという真理)に目覚め、これらの誤る意識等を光に還元し、宇宙神の根源に直結され、私たちの魂が神意識そのものとなつて、現われて来る段階になり、感情業想念の影響を受けなくなったということでしょう。

自分は神の分霊なのに何故このように悩むのかという疑問や『人間と真実の生き方』にある「自分を赦し人を赦す」の自分は、分霊の自分なのか、業生の自分なのかという疑問も、自分が魂即ち肉体界に天下ってきた分霊の相（すがた）であると知った時、その疑問は氷解することでしょう。

「自分を赦す」とは、自分が愛と調和と美をこの肉体界に現わすために下りてきた分霊であり、「物質界の業生の波を超えている自分」ということを再確認(思い出し)、即ち自分は神の光の側にあることを思い出し、目の前に消えてゆくために現われた業想念の姿に把われている自分を、その把われから解き放ち、その業想念を光に還元することであることが理解できることでしょう。

そして「人を赦す」とは、自分以外の人も神界では自分と一つの存在であり、現われた業想念の姿に把われている人も、自分と同じ存在であり、業想念の把われから解き放たれるよう、その人の天命を祈る、即ち光を送るということでしょう。

また、「自分を愛し人を愛す」とは、同じく自分が愛と調和と美をこ

の肉体界に現わすために下りてきた分霊であるということを確認(思  
い出)し、この業想念で渦巻く肉体界で、業想念を光に還元している自  
分を信じ、尊敬(愛)することといえます。そして、自分以外の人も神  
界では自分と一つの存在であり、そのことを再確認し、信じ、尊敬する  
ということでしょう。

## 思い通りになる世界

次に昌美先生の、前述のすべてが成就する世界というお言葉は、どう  
いう世界なのかみてみましょう。ここで言われている「すべては成就す  
る世界」は、別の言葉で言えば、「思う通りになる世界」でしょう。

五井先生著『心貧しき者は幸いなり』によりますと、神さまの言われ  
る「思う通りになる世界」とは、調和している。みんな仲よくしている。  
心が平和である。あらゆるものに把われない。自由自在に動ける、と  
いう世界で、その世界に行けば、思う通りになれるということです。そ  
の世界に行くためには、肉体のあらゆる五感六感の想念波動を超えてい  
かなければならないと五井先生は解説されています。

「・・・この世の中では、自分の思うことは、なんにも成らない。  
本当は思う通りになるんですけど、思うようになっていないで、  
逆に現われている。金持ちになりたいなりたい、と一生懸命稼い  
でも、働いても、金が集まらない。病気を治したい治したい、と  
思っても病気で苦しんでいる。仲よくしたいと思っても喧嘩  
している。そんなことだと思う通りになっていない。ところが本当

の世界は思う通りにならないわけです。

神さまの思う通りというのは何か、その前に神さまの世界  
というのは調和している。みんな仲よくしている。心が平和であ  
る。あらゆるものに把われない。自由自在に動ける、という世  
界です。そういう世界に行くためには、肉体のあらゆる五感六感  
の想念波動を超えていかなければならない、という方法をお釈迦  
さまは言葉で教えたし、体でいわゆる統一して座禅観法して教え  
られた。イエスなどもそうです。

“ 汝らの内なる神の国を觀よ”、自分の内に神の国がある、心  
の中にあるんだから、それを觀なければだめだ、と言って教えてい  
るわけです。『心貧しき者は幸いなり』五井先生著68ページ)

ここで、「その世界に行くためには、肉体のあらゆる五感六感の想念  
波動を超えていかなければならない。お釈迦さまやイエスがそのことを  
教えられた」と五井先生は解説されています。この「肉体のあらゆる五  
感六感の想念波動を超えていかなければならない」とは、具体的にどう  
いうことなのか。大変参考になる五井先生のお言葉があります。

『続宗教問答』133において、何事もなし得ぬよつな肉体人間觀の  
ままでは、いかなる手段方法を用いても個人も人類も救えない。「凡愚  
(肉体人間觀)の自分がみ仏の中に消えた時、その身そのままがみ仏の  
行為となり、大光明の輝くところとなる」

そして凡愚の自分について、世界平和の祈りをしているから自分は他  
の人間より上等なのだ、また自分はまだまだ悟っていないというような



悟ろうとする自分と仏心とひきはなして考えたり、自他差別の感じをもったりして、神のみ心と自分の心とはつきり離れているので、神我一体にも仏心一如にもなれないでいる」状態であると説明されています。そして「神仏との距離感、自他の差別感等が、念仏や祈りの中に消えた時に大光明の輝くところとなる」と言われています。

## 生命の流れは滞らせない

これを別の角度から理解するために、『神は沈黙していない』にある、次ぎの五井先生のお言葉をみてみましょう。

「生命の流れというものは、滞らせてはいけません。生命の流れが滞るところに病気や不幸や災難が現われてくるのです。生命の流れを滞らせぬためには、兎や角想い迷い、心を痛めつけることが一番いけない。それは善悪にかかわらずいけないのです。そうした生命の流れを滞らせる想念行為が、ひいては世界人類の運命を悪化させることになってしまうのです。」

この世の善悪に把われて、生命の働きを損ねては、折角その行為が善意から生まれたものでも、マイナス面の働きとなってしまいうのです。老子の在り方を観ていると、実に真の生き方がよく判ります。自由無碍にして無為、老子の存在には、只感嘆の声あるのみです。

こうしよう、ああしよう、と自分の頭脳で思っているうちは、たいしたことは出来ない。といっても、善いことをしようと思っ

てすることは、しようと思わない連中より、はるかに善いにはきまっています。しかし、その善が宇宙の運行の、絶対善から観ると、全く小さな善ということになります。

ですから、自分の頭脳でやろうと思った善行為を、もう一度、神のみ心の中にお還えしして、世界平和の祈りの中から、今度は自然に出てくる善行為にしてゆく、という方法にすると、必ずその人の行為が生きてくると思います。

自分の頭脳だけで考えた善行為は、一方では成程善いことだと思われても、一方からは反対の眼で見られるかも知れないのです。自分の頭脳で考える想いを、一度祈り言を通して神様のみ心の中に入れ切ってしまうと、同じことをやるにしても、神我一体の行為として、右をも左をも、誰をも生かし、宇宙運行の大きな流れに沿った善行為となってくるのです。（『神は沈黙していない』148ページ）

これから次のように言えるのではないのでしょうか。その世界にいくためには、生命の流れというものは、滞らせてはいけません。そしてそのためにはいけないことが具体的に示されています。兎や角想い迷い、心を痛めつけることが一番いけない。それは善悪にかかわらずいけないといわれています。そして老子の在り方を勧められているのです。

こうしよう、ああしよう、と自分の頭脳で思っているうちは、たいしたことは出来ない。

自分の頭脳だけで考えた善行為は、一方では成程善いことだと思われ

ても、一方からは反対の眼でみられるかも知れない。自分の頭脳で考える想いを、一度祈り言を通して神様のみ心の中に入れ切ってしまうと、同じことをやるにしても、神我一体の行為として、右をも左をも、誰をも生かし、宇宙運行の大きな流れに沿った善行為となってくるといわれているのです。

## すべては成就する世界を現わす

昌美先生のお言葉は、拙書『究極の光の一筋を降ろす大天命』でも言及していますが、「宇宙神と直接交流し、自らを開発する」チャクラを開く、即ち直観力を完璧に身につけ、チャクラを正しく開けば、ひらめきに添って能力が現われる」と、すべては成就する世界を現わす方法を示されています。

『白光誌』2010年3月号「神人とチャクラ」において、昌美先生は、チャクラは正しく開く必要があることについて次のように言われています。

チャクラが開いたときに現われるのは、予知能力ではなく、また予言する力でもない。自らの目を通して神を見、また自らの耳を通して神の声を聞くことができ、自らの肉体もすべて整っていることが判るようになるのである。さらに、神とつながるチャクラが開くと、神のバイブレーションがあることが判るようになる、感覚が微妙になり、風景も輝いて美しく見えるようになる、また音も味も、妙なる美しいものが感じられる。そして、自分たちだけが素晴らしいのではなくて、すべての生き

とし生けるものが全部つながっていることが実感できる。三次元世界にいながらにして、神界に生きられるようになるのである。

一瞬にしてすべてが神そのものとなってしまえば、神の心が自分の心として判り、神のなさしめることが自然に判るのである。聴こえてくるものは「絶対に大丈夫。すべてが光に包まれているし、人類の行方はすべて一つである」という神の言葉であり、そして自分もいつの間にか、自らの言葉を通して神の言葉を――人類が本当に行き着く美しい場所を、知らないうちに語っている。即ち神人たちは自分自身の姿を通して究極の真理を示すのである。「自分自身が完璧に神とつながって一光なのだ、すべては一つなのだ、すべては破壊されることなく、神様の中に包まれて生かされているのだ」ということを実感し、それぞれが神人としての輝かしい生き方を示すことを示すことによって、世の中が自然に変わってゆくのであると言われています。

昌美先生のお言葉は、五井先生の「思い通りの世界」をさらにわかりやすく「すべてが成就する世界」と解説されていることがわかります。

さらに因果説、即ち過去に放った想念に翻弄されない、思った通りに実現される世界として提唱されているのではないでしようか。

あらためてその内容のポイントをみてみましょう。

因果説は過去の因果で未来はきまらなという真理にやるもので、過去にこだわる必要がない。自分の現在も未来も、自分の自由意志と創造力によって、いかようにも創り出してゆけくことが出来る。切り開いてゆ

くことが可能で、また、変えることも自由に行えるのである。

過去が現在に影響を与えているという潜在意識を取り除くために、時間は過去から未来へ流れてゆくのではなく、未来から現在、過去へと流れてゆくのであると説かれています。今この瞬間未来について思ったこと、考えたことの『成就』は、いすれ現在にやってくるのである。そして今現在、この瞬間、同じことを観念でやるのではなく、意識をもって繰り返しインプットすることにより、時間はどんどん未来から現在、過去へと流れてゆくのだと解説されています。

問題を解決するためには、過去に遡り、失敗や不幸の原因を探り出すのではなく、まさに今の瞬間、自分の未来に関する希望や出来事、そして輝かしい人生の設計図を強く思い、“成就”“必ずなる”“絶対大丈夫”“すべては可能”“すべては完璧”“すべては大調和”・・・など光明の言葉を心の中に、魂の中に強くインプットすることであり、それによって自らの人生の未来に刻まれたことになり、それが現在に流れてくるとされたのです。過去に遡り、失敗や不幸の原因を探り出すことは、そこに莫大なる時間とエネルギーを割き、その上突き止めた原因により、新たに否定的感情想念を引き起こしてゆき、因縁因果の循環から抜け出すことができないのだと言われているのです。

別の言い方をすれば、人間は神の子であり、本来完全性であって、この世の因縁因果の波、悪や不幸や病気等々悪想念は、過去の誤った想念行為の消えてゆく姿である、という真理の言葉を肯定し、その業想念を

常に消し去ってくれている守護の神霊への感謝行をつづけてゆくという五井先生が示された方法を継承しつつ、過去の誤った想念行為の消えてゆく姿への把われを出来得る限り最小にするため、自分の未来に関する希望や出来事、そして輝かしい人生の設計図を強く思い、“成就”“必ずなる”“絶対大丈夫”“すべては可能”“すべては完璧”“すべては大調和”・・・など光明の言葉を心の中に、魂の中に強くインプットすることを提唱されたということでしょう。

「私の説くところの果因律は、原因である物質世界を超えたところに、その端を発しているのである。ということは、先に結果を作り出すことによって、自ずと原因がそれに従ってくるという法則による方法なのである。この方法でゆくと、結果は自分自身の心の中にあるということになる。

有限なる物質世界に焦点を合わせてゆくのではなく、すでに心の中にある、無限なるものに心をあわせてゆく方法なのである。」

『幸せを創る光明思想』

すべてが成就する世界を現わすとは、端的にいえば、我即神也の究極の真理を実践することにより、即ち自分は闇の側ではなく、神の光の側に存在するものであるという真理を実践する、昌業先生のお言葉でいえば、有限なる物質世界に焦点を合わせてゆくのではなく、すでに心の中にある、無限なるものに心をあわせてゆくことにより、自分を生かし、相手を生かし、愛と調和と美の世界をこの肉体界に現わすということになるのではないだろうか。